

令和 3 年 6 月 6 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02429

研究課題名（和文）社会教育テキストとしての物語和歌の研究

研究課題名（英文）The waka poems of classical tales as social education texts

研究代表者

田淵 句美子（TABUCHI, Kumiko）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：80222123

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：平安時代・鎌倉時代に作られた物語の和歌について、教育という新たな観点から研究を行った。『源氏物語』などの作中和歌を中心に検証と分析を行い、物語の和歌は、物語中の人物の単なる会話や発語ではなく、貴族女性や女房達への社会教育テキスト、もしくは詠歌テキストとしての機能と役割を担っていたことを、作者・読者・利用者・受容者などの意識と営為をふまえながら、具体的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代の私達にとって、『源氏物語』などの王朝物語文学はあくまでも「文学」というイメージである。しかし当時、貴族女性が物語を読むことは、社会性を身につけるための教育の一環であり、特に和歌は人との最も重要なコミュニケーションの手段であり、自己表現手段でもあった。物語の和歌はそうした社会教育テキストとしての役割を担っていることを本研究で明らかにした。つまりここでは、和歌を学ぶこと・和歌を詠むことは、私達が詩歌を作ることとは別次元の社会的行為であった。こうした捉え方は、王朝物語文学や王朝和歌へのイメージを一新させるものであり、「古典文学」とは何かという問題へも繋がり、学術的・社会的意義が高いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：I examined and analyzed the waka poems of classical tales in Heian and Kamakura eras, particularly waka poems of Genji-monogatari from a new viewpoint. I have confirmed that waka poems of classical tales were the social education texts and waka texts, for noble women and ladies-in-waiting in the court.

研究分野：日本古典文学

キーワード：和歌 物語 宮廷女性 女性教育 社会教育 宮廷文化 女房文化 源氏物語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1)現在の私達が平安・鎌倉期の王朝物語を研究する時、たとえば代表作品である『源氏物語』は、世界文学としても著名な優れた達成であるゆえに、現代の意識で作品を文学として捉えてしまうことが多い。しかし王朝物語は、当時の人々にとって、単に文学や悦楽であったのではない。物語は宮廷社会の人々の価値観・行動、態度や美意識、社会のありようなどを教えるための実用書としての役割を有していたと考えられる。特に社会に触れずに家の中で育てられ、入内・結婚した後は宮廷社会や家の中心となっていく若い姫君にとって、あるいは宮廷に女房出仕して社会的に活躍する女性にとって、物語は重要な教育的テキストであった。貴族女性たちは、物語の中身によって、人間や社会、自己のあり方について学んだのである。田淵は、「女性教育メディアとしての物語と和歌の言説機能 平安・鎌倉期を中心に」(研究代表者田淵句美子・基盤研究(C)・平成25~29)などにおいて、従来は閑却されがちであった、物語が女性教育メディアとしての機能を有していたという視点から研究を重ねた。

(2)この一連の研究で次第に明らかになったのは、物語の作中和歌、すなわち物語和歌を、現実の宮廷社会における社会教育テキストという視点から捉え直すことの重要性であった。物語中の和歌や贈答歌のあり方は、女性のみならず、男性にとっても社会的テキスト・規範であったと考えられ、当時だけではなく、中世に至るまで規範としての位置を保持していたとみられる。けれども中世において、物語は古典としての位置を獲得し、物語和歌は中世歌人によって本歌取りされる歌となったため、従来の物語和歌の研究や位置づけは、専門歌人の題詠歌における『源氏物語』受容に集中しており、平安・鎌倉期において、物語和歌が社会的テキストとして読まれ受容されたことについて、総体的な視点から論じられてこなかった。

(3)このような背景と、研究成果の蓄積の上で、平安・鎌倉期の物語の作中和歌、すなわち物語和歌を、社会教育テキストという観点で、中世からの照射を入れながら、その役割と機能を総体的に究明することが、平安・鎌倉期の和歌研究において極めて重要であると考えたことが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

(1)平安・鎌倉期の宮廷社会では、女性達のために多数の王朝物語が創作され、その中には物語の登場人物達が詠む和歌が多く織り込まれた。当時において物語は、基本的に女性が社会を知るためのテキストであったとみられるが、その物語の中に多数詠み込まれている和歌は、単に、登場人物の心中や会話等を示すものではない。宮廷に生きる女性や男性が、種々の場面でのどのような和歌を詠むべきかを示し、更にその和歌が人間性と不可分であることを示すテキストであり、規範としての機能を持っていたと考えられる。社会教育テキストという新たな視座から、平安・鎌倉期の物語和歌がどのような機能と意味を有していたのか、総体的に見直して検証することを目的とする。社会教育テキストという特質は、他の領域、たとえば説話集、教訓書、仏教書等には当然内包されるものとして古くから研究されているが、それが物語和歌にもあることを可視化することが、本研究の目的である。

(2)その作品が、成立した後、当時や後代においてどのような意識で受容されたのかということは、その作品の特質の根幹に関わる。物語の内部だけではなく、縦断的・脱時代的視点から位置づけて相対化することが重要である。本研究では、物語の内外の言説から、物語成立時における作者とその集団、読者とその集団という宮廷とその周辺のネットワークがもつ意識を考え、さら

には後代である中世からの視点、つまり享受の意識を重視して、物語和歌への意識を明らかにしたいと考える。

(3)物語の中の和歌と物語和歌を編纂して成っている諸作品を合わせ見ること、物語和歌に対する意識を、11世紀から13世紀という文学史の流れの中におき、物語作者と読者集団の両面から探る。物語和歌と物語和歌の編纂資料を対象に、そこに顕在化されている意識をあぶり出し、平安・鎌倉期の物語和歌史を捉え直すことをより広く目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、物語内部における和歌の役割・意味を明らかにするだけでなく、中世からも照射することで、物語和歌の特質を考える。享受のあり方は、その時代において、最も鮮明に純粋にその作品への意識や当時の価値観をあらわすものであり、享受・受容という観点をも視野に入れて重視し、物語和歌への意識を探っていく。

(1)『源氏物語』の和歌を取り上げ、その内容を分析・検証し、物語和歌にどのような社会教育テキストとしての役割・特質が付与されているのかを分析・検証する。

(2)物語和歌および物語和歌を制作したり享受するのは、貴族女性、特に宮廷女房が主である。担い手である宮廷女房について、その実態と特質、および女房集団の役割と機能について、女房文学という観点から広く考える。

(3)中世における物語和歌への批評・言説を調査・分析し、物語和歌が担っていた社会教育的テキストとしての位置づけを可視化する。

(4)中世に物語和歌を撰歌・編纂して成立した作品を分析検討し、編纂・受容の意識を社会教育テキストとしての側面から再考する。

4. 研究成果

(1)当時女性が物語を読むことは、集団社会の疑似体験であり、和歌はその中でも最も重要なコミュニケーション手段である。それは心の可視化であり、和歌にはその人間の心性が凝縮されて示され、人間観や価値観が鮮明にあらわれている。和歌は人柄を表現し、伝え、知る、唯一の創作体であり、社会的意味性に満ちている。物語和歌は、物語作者にとってはそうした意味で社会教育テキストとしての発信体であり、宮廷社会の構造や身分関係に基づくものでもあった。この点及び関連する論点を据えて、『源氏物語』などの和歌の検証・分析を行った(「『源氏物語』の贈答歌試論」・「窪田空穂による『源氏物語』和歌注釈」)。

(2)『源氏物語』をはじめとする物語の和歌は、平安期から鎌倉期にかけて多くの受容がなされたが、平安末期以降の歌壇における和歌は、題詠歌が圧倒的に主流となってそこに物語の和歌が取り込まれ、虚構の題詠の世界で増幅していったため、そもそも物語和歌が内包していた現実の男女の心の表現化、贈答歌というコミュニケーションとしての社会的役割・機能が、専門歌人を中心と見る和歌史では見えなくなっていた。しかし中世以降も、依然として現実の社会で贈答歌は行われ続けており、歌壇の専門歌人ではない、普通の貴族・女房たちによって、『源氏物語』などの物語和歌が受容され続けていた。特に『風葉集』は、上記の物語和歌の役割・機能から、詠歌テキストとしての役割をもっていたと推定される(「『風葉和歌集』の恋歌の編纂と享受」)。これは本研究の最終年度に行った研究であり、中心的な研究成果である。

(3)物語和歌を社会教育テキストとして読むのは、主として女性、特に女房層である。そもそもこの女房集団とはいかなるものか、なぜ女房によってこれほど多くの物語や和歌が作られたのか、女房文学がどのように日本文学を貫流しているのかについて、包括的に考えることを行った

(『女房文学史論』)。また、物語における女性の和歌のありように密接に関わる、女性と声の問題について論じた(「声の禁忌 女房の領域と制約」)。

(4)平安後期から中世にかけて物語や物語和歌を受容・批評する資料から照射した。物語の和歌を多数収載する『無名草子』と『物語二百番歌合』を比較しつつ論じ、また女房の意識を鮮明に示す『阿仏の文』や『とはすがたり』についても論じた(『女房文学史論』、「宮廷女房文学としての『とはすがたり』」)。

(5)その他、詠歌テキストという観点で、本研究から派生する形で、いくつかの研究成果が得られた。これらについては今後さらに研究を深化させたいと考えている。なお『女房文学史論』の一部については、研究期間中に中国語訳を完了しており、いずれ中国で刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 194
2. 論文標題 『風葉和歌集』恋歌の編纂と享受 「風」、ジェンダー、異性装など	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 850
2. 論文標題 宮廷女房文学としての『とはずがたり』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 40-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 -
2. 論文標題 窪田空穂による『源氏物語』和歌注釈 与謝野晶子との対照性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 和歌史の中世から近世へ（単行本）	6. 最初と最後の頁 509-528
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 50
2. 論文標題 小倉色紙と「嵯峨中院障子色紙形」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 かがみ	6. 最初と最後の頁 36-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 9
2. 論文標題 『百人一首』の成立をめぐって 宇都宮氏への贈与という視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中世宇都宮氏 一族の展開と信仰・文芸 (戎光祥中世史論集9)	6. 最初と最後の頁 255-279
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 29
2. 論文標題 『源氏物語』の贈答歌試論 六条御息所・朝顔齋院・玉鬘など	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田淵句美子	4. 巻 2
2. 論文標題 声の禁忌 女房の領域と制約	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 100-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 浅田 徹、小川 剛生、兼築 信行、神作 研一、田淵 句美子、堀川 貴司、家永 香織、中村 文、紙 宏行、山本 登朗、久保木 秀夫、渡邊 裕美子、渡部 泰明、安井 重雄、吉田 薫、檜垣 孝、石川 一、寺島 恒世、佐々木 孝浩、杉本 まゆ子、大谷 俊太、綿坂 豊昭、鈴木 淳、海野 圭介、深沢 眞二、久保田 啓一、盛田 帝子、錦 仁	4. 発行年 2020年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 642
3. 書名 和歌史の中世から近世へ	

1. 著者名 田淵句美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 629
3. 書名 女房文学史論 王朝から中世へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------